

114  
118  
103

弓原雜考

大觀文庫



弓

古事記 異文

神代よりもてり千才一の弓

舊本紀

大ハ弓とそいつをやあ弓

義經紀

川流の

弓弓 蒼木の弓集又本集 白木義經紀 お経の内

東方經

弓弓 本集又本集

義經紀

弓弓 驚弓

弓弓 用い一弓も直弓弓 万本集弓 本集又本集

義經紀

弓弓 本集又本集

弓弓 檀弓弓 互事紀三代宮本姓也弓 本集又本集

義經紀

弓弓 本集又本集

弓弓 檀弓弓 互事紀三代宮本姓也弓 本集又本集

義經紀

弓弓 本集又本集

櫛弓弓 三代宮本姓也弓 本集又本集

義經紀

弓弓 三代宮本

多あらうるかのひくい駒作多所をかき

と

津のまゆ

西本無鳥深輝雄

絶地はと南雲(西)ととつふの三手(アマ)  
地(アマ)の里文集(アマノシタヒ)定本(アマノシタヒ)御(アマノシタヒ)記(アマノシタヒ)薩摩(アマノシタヒ)元  
甲陽(アマノシタヒ)軍(アマノシタヒ)機(アマノシタヒ)克(アマノシタヒ)陣(アマノシタヒ)政(アマノシタヒ)局(アマノシタヒ)

大承年(アマノシタヒ)年(アマノシタヒ)源(アマノシタヒ)と(アマノシタヒ)も(アマノシタヒ)也(アマノシタヒ)と(アマノシタヒ)す(アマノシタヒ)委(アマノシタヒ)  
ナニ年(アマノシタヒ)元(アマノシタヒ)之(アマノシタヒ)絶(アマノシタヒ)地(アマノシタヒ)と(アマノシタヒ)也(アマノシタヒ)と(アマノシタヒ)計(アマノシタヒ)也(アマノシタヒ)  
知(アマノシタヒ)も(アマノシタヒ)絶(アマノシタヒ)地(アマノシタヒ)と(アマノシタヒ)也(アマノシタヒ)と(アマノシタヒ)知(アマノシタヒ)也(アマノシタヒ)

全

改(アマノシタヒ)行(アマノシタヒ)出(アマノシタヒ)之(アマノシタヒ)絶(アマノシタヒ)

# 伏竹考

桑山左角門藤原  
謹序述

伏竹秀

藤原假房述

古代より鬼木石を和木と本命合ひ下り  
化けたり變りたりて今うといひ物、わす  
ゆよゆるたぬくに見ゆ不ぞ

賴政以の事よかとゆかよや純古事  
もとへば、いき下

むきひきよまくまくまくよゆくゆく  
一宿毛屋子はな野色——

夫木原

弓 郭機古帖 ものまこと

梓ちうも勧まく色下ゆる牛

おのむきひく毛翠下す可の

スホ信東

つめざしぬわく木もうねうてう

ぬ伊いはくよ引人をな

繫

場よ内あ木下合す御事ふおの事よ、アシテねる  
たまう、裏そり地高よぬる、わち東年治物語  
荒落も貞能も持ゆる、かく作る。也能正モ可  
うと入沙アたあとしのまうやま、被とあれ  
合す野ういぬ行くともうやま、被とあれ  
をまうち、被おどりもまうやま、被とあれ

平治物語よた馬頭義朝、帝代の綱

直垂よ黒糸の鎧よ、鎧形すうての故胄

絶えくの中界里、相そ矢盾少節、卷すうねて云

袖よ篇よ表のうも木下合すうせう、表木はうと  
あええ表が、木のそり地高よ、表と表よ、わち木  
木合すううい、表のそり地高よ、表と表よ、

篇くと表くと表くと表く

十萬坂魚鰐うの或設曰陸奥國栗原郡  
金成村金田八幡宮藏弓一張長六尺八寸  
傳言本郡三迫末野邑十萬坂有竹源賴  
義東征之時伐其竹造良弓十萬以減  
安部氏是其一也

倍

田村丸右  
京大夫敬顯朝臣所藏之傳云賴  
義朝臣至當國造う十萬張其竹抹之  
栗原郡末野村其地至今称十萬坂此  
蓋其一也

此う長ラ一ハ七尺三寸五分一ハ七尺一寸七分  
一ハ六尺九寸アリテ長短各別也あよち すた  
事可一竹より丈丈五丈以上アシヤン詳シシテ石川屋  
さんわすと定スバ自身の寸とせ定め政事とのが  
うもあうてアシガニケル事アリストナセキヤハ  
うち長短あり以事共ヨリ思ひ立ツケルトモうな  
セ短クヨリヒヌ類也の

林子平曰僕嘗て圓すよカマホコうて  
やまく一又十翁キよリノお傳より御  
武備ぶび乃よ勧勸化久所よと云カマホコ  
良形よ圓て名つて下さる十翁キハ比名  
や高たか翁おきのよ十翁じゆうくわト云ふわむ比名  
ちユよ通つづく十翁じゆうくわト勧すすめめ十翁  
うといつアリす勧すすめ白しらにし外ほか也よ是  
食く肉にく牛うし也よ死しも雨あめハハ多お不ふ水  
中なか入いハハもと前まへも損そん事こと也よ

其の後と少林寺をより初入院する  
塔と栗原郡と川井子下の高倉不  
了は十番坂のアシノヒヤミと川井子下  
御船<sup>船</sup>の高船も船舟御子<sup>子</sup>  
船舟御子<sup>子</sup>一<sup>一</sup>以<sup>レ</sup>賴義朝臣<sup>君</sup>  
船舟御子<sup>子</sup>一<sup>一</sup>以<sup>レ</sup>賴義朝臣<sup>君</sup>  
船舟御子<sup>子</sup>一<sup>一</sup>以<sup>レ</sup>賴義朝臣<sup>君</sup>  
船舟御子<sup>子</sup>一<sup>一</sup>以<sup>レ</sup>賴義朝臣<sup>君</sup>  
船舟御子<sup>子</sup>一<sup>一</sup>以<sup>レ</sup>賴義朝臣<sup>君</sup>

嘉平元年正月詔書  
吉原景元と詔記<sup>令</sup>賴義朝臣

東行

後涼泉帝志永元六年正月  
平の年近<sup>令</sup>二年の有<sup>アリ</sup>賴義朝臣  
出生<sup>アリ</sup>九<sup>九</sup>十年<sup>アリ</sup>もあやめん  
物の<sup>アリ</sup>アキ<sup>アキ</sup>やかく<sup>シ</sup>  
わきと<sup>アリ</sup>の着<sup>アリ</sup>ゆし因<sup>アリ</sup>色<sup>アリ</sup>物<sup>アリ</sup>  
賴義朝臣の事<sup>アリ</sup>とち御子<sup>アリ</sup>と此<sup>アリ</sup>書  
→ おほき<sup>アリ</sup>の事<sup>アリ</sup>とち御子<sup>アリ</sup>と此<sup>アリ</sup>書

もとよりも急の部の終。主考は後  
じひて、さううそとやうじけるよ。  
わざとゆくらひをほついてる。ひゆる  
しふの音すこしともあねい花の音を  
わざとおとせんかといふいあたかの音  
差あへぬする。

頼義公居東海とあへばの子供牛のお  
よ方毛に近と七年内かのたひ  
すゑへり。頼義公居のじよ供牛  
うぢとひそひとひそひとひそひとひそ  
うぢとひそひとひそひとひそひとひそ  
うぢとひそひとひそひとひそひとひそ

以あまきをだす事の福也

知ゆる。あは信実等と錦衾の今  
うえこゝに勅撰六帖と寛文之年は  
よ万毛とおでり。折政とひそひそ  
ほひ。寛文は信濃守帝の年号である  
がれ。秀忠は後あるも今年余し。自らは  
伏井とひそひそひそひそひそひそ  
ひそひそひそひそひそひそひそひそ  
ひそひそひそひそひそひそひそひそ  
ひそひそひそひそひそひそひそひそ  
新撰六帖。さうねま角鶴細考。秀忠はさき  
を新薦。新鶴。新刀。新弓。新馬とゆてよる。

秀衡は家康之年鎮守府の將軍

文治四年正月七日余て幸天東

文治三年

賴政とい齡十才もてひく

十月

秀衡

鳥羽帝の御宇よりまんれ義

一  
一

秀衡

鳥羽帝の御宇よりまんれ義

徳是と以て秀衡もよ秀衡の姓

帰

秀衡

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

也

杆



合ひあらうの戰場すゑじよへまし  
アラモト

継おちと爲め生れ本牛合ひあらう  
イヒヨウ

まふ原 う 天にえ年 頭まつあ今

いよ駿人まねうのやもとくら  
セヨモシテわんぬくら 釋迦法師  
ぬまゆ因も恭草す本牛合ひあらう  
カ祭 ままひ行幸もうと裏

物よ天にも

鳥羽帝もまうすくわみことうとも  
あうにおそれてはあとかくすくあ  
ちと本牛合ひあらうとも決定くらし  
さきのキルホの夜あやか星あやかの事の  
長ひき<sup>ハシナ</sup>祭也

夫木原 十五首 木

アラモトアラモトアラモトアラモト  
アラモトアラモトアラモトアラモト  
アラモトアラモトアラモトアラモト  
アラモトアラモトアラモトアラモト  
アラモトアラモトアラモトアラモト

ねと身じてあるとおりの行わるよ  
とてたふすうが能する大すらあら  
れかに見ひらわざりゆせり方  
ほりつてうとせんせんをもせんせん  
詮合跡の多よ角井も海所も傳は七度  
すまうれとえ峰もゆくとする陰陽  
高きまゆと取とらえ川と傳  
そりあらわる。

まほうねまゆれぬあれどらやあら

あくせふよふかわ原と原あはき  
曲のうねる或有とまをねる

曲ねうり様よわうとんよし様よし  
あめゆ”櫻よかうとん櫻よ櫻よ

えおとえまふ葉 無

開ちうちにきぬよつぶねあ興  
つきぬれゑよあふくへは修理り  
こむらいた櫻よかうとくに

アヌ声のびよも

は樹の木の  
事とがば  
ち出る  
あらす  
あらう  
内のある  
ことある  
考ひうる  
事もあら  
うと云ふ

楓青草はちややれにわたりあ  
見らるし相撲國あらわのわ人のき  
つまわらうの木をよけやむかし見ら  
ましあと割くえらをあきうりやれび  
門立は木理色ふやはよめあは門立木理と  
極むゆうが本理ありたが更生と錦織  
極むあとゆるがよを強くしておだとよ  
又極木とゆる毛衣のうししつきの木  
けやみいアシラヒー其の半天よアモ

ねわらり眞の日をよりけやふの葉はあ  
得上へタリそく黒マリイキシふせ  
はつまわらふの紫ハシナリてあひ得毛  
よしも是が以て見らるやうと云機  
のよりやふと初とつりとす字書あが  
徳や 楓青草は木の事とよめうと書く事あら  
うと云ふ

御つよけやみもお白石をも  
徳矣しなじとくも

追加

木牛合はむちよかと内牛と添へ  
うへあんじてんとうとしのせんとくに

古風故集 雜

算白龍恩キテ石韻遠おひく  
うよつておやもととぞえ

ありの牛わきよ賜ゆそ 泰法師  
太平和法師古風故集 雜 故  
海法師小野社主の

秋もなまし 喜法師 因東秋廣意口章

春日神木守法子 ほらせまし すゆけり有す  
トマトハ 極海法師古風故集 雜 故  
海法師小野社主の

都入社とぞとく 春日守因東秋廣のゆゑ  
に道法師古風故集 雜 故  
海法師小野社主の

光明帝の事古風故集 雜 故  
海法師小野社主の

魚國三年にふるへまか法師太平和法師の事

アリあるか内牛の牛 わく

見じる事のくわくもひそち櫻古風故集 雜 故  
海法師小野社主の

もじの側おひじの内牛古風故集 雜 故  
海法師小野社主の

モジの側あとめアヌホ牛をまくくふぶくま  
あとみううかくもるりと大指と角とくいん  
うれ繩もえまくまくとくかくもくとく

まくらへるあやまつをふ押さへて見よ

小笠山あやむ村割のうひ代書は曰小笠原  
信濃ち貞宗はうた扁ヨリ建武年甲の朝  
有りぬ古うろきいぬえもとふくすうち乃  
がそよくぬもと而こそひびと風ひに附  
しやううれ村割乃うひ始也

揚々村割ちうづ肉あ小牛わくう  
サク通哉の以有二丸うふ

又揚々村割古仰アヤムハ志本はうけまや  
信母牛シムウと添タマふ竹の剣タケノソルもん也  
とあゝああのうハ地チよせとひ力カツ絆ハタキ也  
うひ相シマツと微スミ少スモ無ムカシもとざきモトザキ  
銭マネおあよもとす御ミツ事モノ中ナカ全ゼンうらう  
おぬゆう牛シムウとそへてうひをよ達タマフ也  
あやむ色アヤムカラ一イチのうの牛シムウの毛ウツメと入スルい的タマツ也  
内ナカニ牛シムウのひだへ  
えすやか牛シムウ身カラ本ハラと澤シロと走ハシマシ也  
徳トクもよも無ムカシり立タチの割法ハタギハ也

功城圖

二二四

大將

長寧軍

九牛

義家獻墨金

白院山のまほらはゆき良きをうながすと  
山林のよきをあらわすとくわくとくわくと  
うるのよきをうると一張アウセムとくわく  
りとくわくあらわすとくわくとくわくとく  
はくとくわくとくわくとくわくとくわくとく  
あらわすとくわくとくわくとくわくとくわく

新羅

大和國

大安寺

八幡宮

花印功

皇后侍

弓

大和國

法隆寺

藏上宮

太子御

弓

山城國

鷲原三

宮山主

花之武

玉皇御

弓木造

丹塗車

九寸鐵

長七尺餘

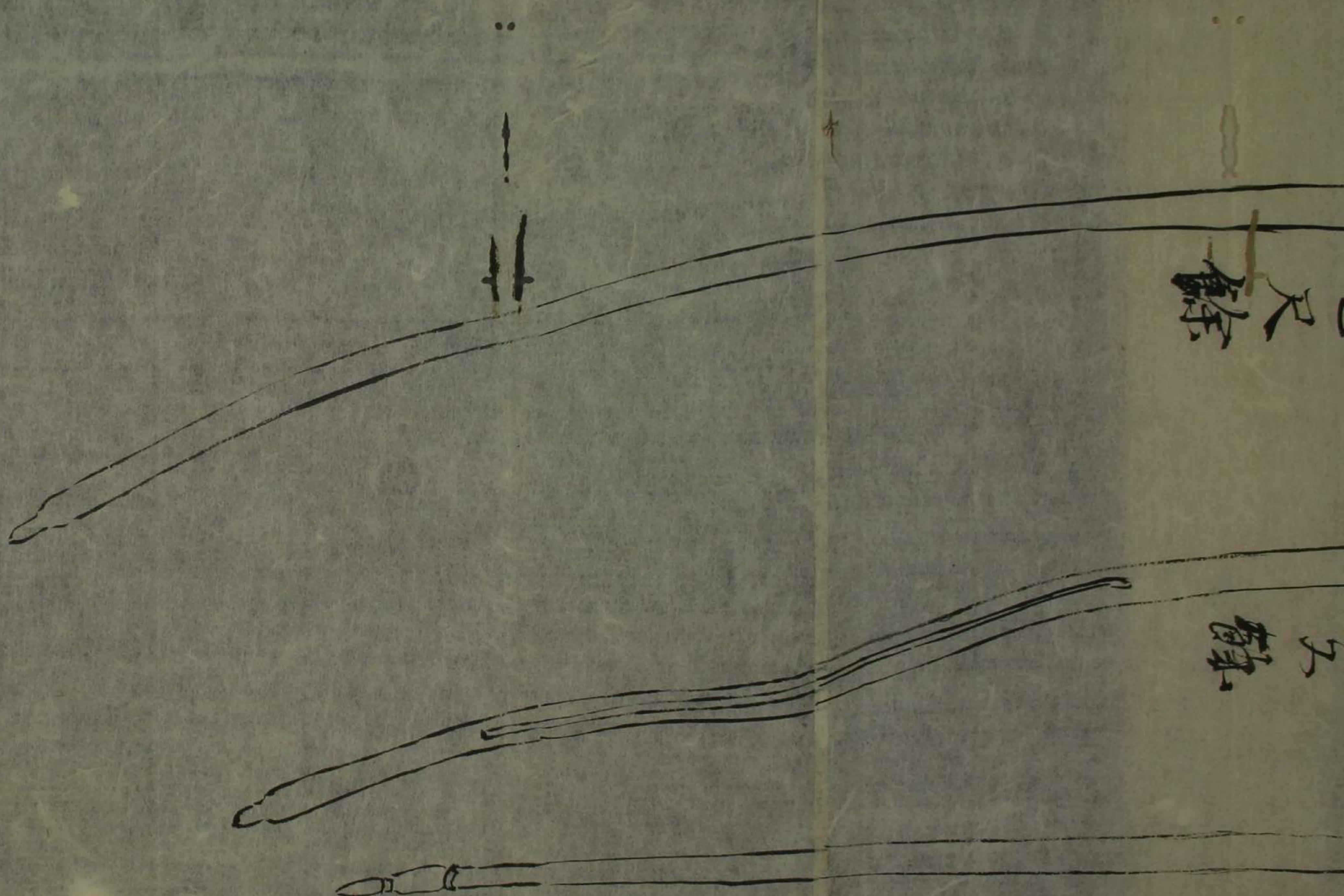
長六尺餘

長六尺二寸五分餘

又餘

餘

寸五分餘



南都東大寺正倉院御寶物圖聖  
武天皇彈弓  
弓長五尺四寸

南都東大寺正倉院御寶物圖聖

武天皇彈弓

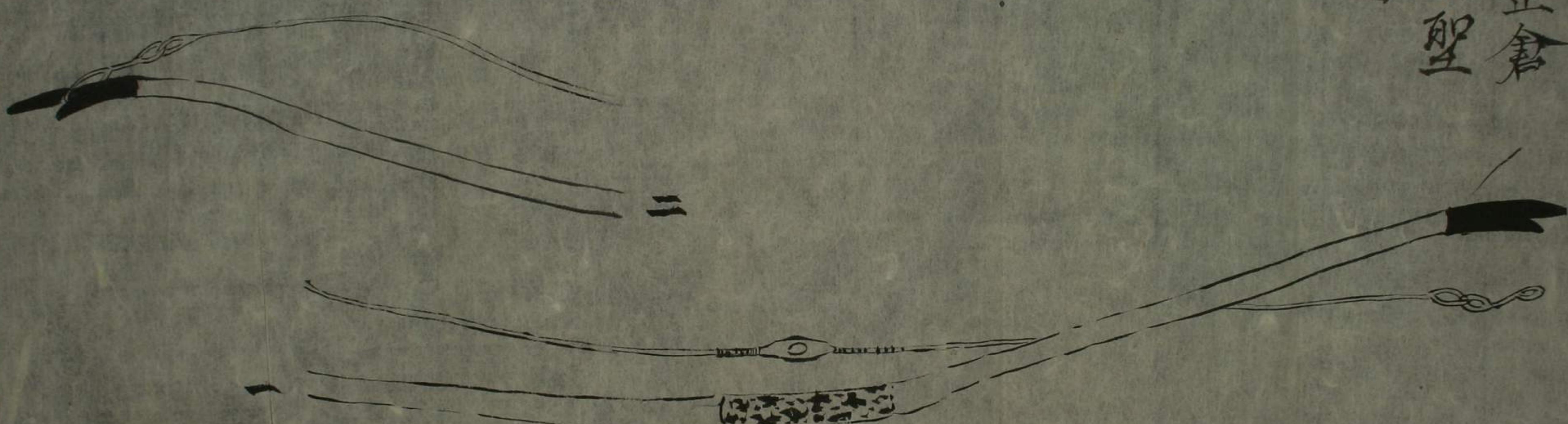
弓長五尺四寸

三

二

一

右四圖本朝  
軍器考圖說



卷之三

老氏子一歲一登天  
降而生人世故名曰  
老氏子者蓋其生於天  
也故曰老氏子也

老氏子

後冷泉天白王 天文四年遣原賴義討安倍

の西申  
賴時五年丁酉賴時仇討

自天文四年迄文化二年 七百七十年

高倉天白王龍應天年己丑夷復み

鎌守府政宗此年ヨリ 文化十三年ニ及

イタリテ六百四十七年

近衛天皇仁平三年癸酉源賴政貳

此年ヨリ文化二年ニ及六百五十年

堀河天皇寛治五年春源義家源武衡此年ヨリ一近七百  
十五年

冬月廿二夜宿山中雪夕未至也先以石房等  
及火、及寢具等至山中宿、松毛之薪、骨等  
而起石竹大板之、被等之毛木亦停向、烹茶以充  
之、使至中年後折枝之于室下、乃知其人之  
子也、即以之名之、此其意也。之佐下、故名其木也。  
予之母、王氏、生平不喜、是又言乎此之謂乎。  
予之墓、在李一里、寒心石旁、王氏之墓也、  
予之墓、在李一里、寒心石旁、王氏之墓也、

皆玉乃々神功皇帝上主そよ半臂也。木うこス  
江ノ井不文宦の人、ゆうらと不用、底五の木たゆうら  
用ゆうらと、白石翁の軍奉彦ミモ檀う櫛う板う  
をど記せる玉詳し記され、後世あふれゆく之ト  
お通すれ政て海ヨメニのキヨアリス伏木の  
一役、若ヨスる。一役を六キラギューハルス  
ナとおーら、以前ナリ。是ニ定一ト、よーく高良山  
ハ、傍哉山ヒトマテのうち義ナリと仰ス。此ナム先年

立人安寧源之進清水文庫本、以平ト、時祀者云々不サ代、志  
一曰村磨、牛天江伐しヒロウヒ今ヒト、通モシナヒト、  
その代方々、從是方全六種車輶とも今ヒト制作、造  
ヒト、子ヒト、牛糞ひ今ヒト、通モシナヒト、一方ナヒト、  
ナヒト、木ナヒト、角ナヒト、アヒト、モヒト、神功皇帝を四十ニ年、  
清首古王用ヒ箭三奉一、日本丸ナヒト、是モ印  
角ニウヒテ、天四ニ神ヒ弓彌ヒテ、おーる。

在に子記念をしよそ裂た一あす又十郎家の記念え  
天竺大寺と作ひますふとをとて下、天朝の鳥の  
擊詩音、帝木弘ケテ疏木と胡牛ニ下又記モ莫奈  
ヒと鳥號ニみゆきてみとヒテ無ハタキイツ天朝  
セラホ知ハスラカシハ古寺過五千里、且ム大根  
此程セシム希、元とクダトお此行、行らセムヒダニ  
多うおもへ

六六田原、この事は必ず主に任のことを曰ふ。

